

庄司薫

赤頭巾ちゃん
気をつけて

—— 芥川賞受賞 ——

女の子にもマケズ、ゲバルトにもマケズ、
男の子いかに生くべきか。さまよえる現代
の若者を爽やかに描く新しい文学の登場！

中央公論社刊

¥360

赤頭巾ちゃん気をつけて

庄司薫

中央公論社

赤頭巾ちゃん気をつけて

©1969 検印廃止 定価360円

昭和44年8月10日 初版

昭和46年5月11日 31版

著者 庄 司 薫 発行者 山 越 豊 印刷所 三 陽 社

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2-1 電話(03)(561)5921(代)

赤頭巾ちゃん気をつけて

ぼくは時々、世界中の電話という電話は、みんな母親という女性たちのお膝の上かなんかにのっているのじゃないかと思うことがある。とくに女友達にかける時なんかがそうで、どういうわけか、かならず「ママ」が出てくるのだ。もちろんぼくには（どなるわけじゃないが）やましいところはないし、出てくる母親たちに悪気があるわけでもない。それどころか彼女たちは、（キャラメルはくれないまでも）まるで巨大なシャンパンのびんみたいに好意に溢れていて、まごまごしているとぼくを頭から泡だらけにしてしまうほどだ。とくに最近はいけない。例の東大入試が中止になって以来、ぼくのような高校三年生というか旧東大受験生（？）とい

うやつは、「可哀そうだ」という点で一種のナショナル・コンセンサスを獲得したおもむきがある。なにしろ安田トリヂで奮戦した反代々木系の闘士たちまで、「受験生諸君にはすまないと思うが」なんていうほどなんだからこれは大変だ。かくしてぼくたちは、まるで赤い羽根の募金箱か救世軍の社会鍋みたいになまり中から同情を注ぎこまれたうえ、これからどうするの？ 京都へ行くの？ といった一身上の問題に始まり、ゲバ学生をどう思うかとか、サンパとミンセーのどっちが好きかとかいったアンケートまでとられて、それこそ、あーあ、やんなっちゃったということになるわけだ。それに言い遅れたけれど、ぼくの学校が例の悪名高い日比谷高校だということは、同情するにしろからかうにしろ、すごく手頃な感じがするのではないかと思う。

ところで電話の話に戻るけれど、このなんともついてない日を（あの医者は「要するにふんだりけつたりですね。」と言って笑い、そしてぼくもつい一緒に笑ってしまったのだが）、ぼくはまず女友達に電話して、テニスの約束を断わるというサエない話から始めなければならなかった。何故かといって、タネなしで手品はできないように、爪なしでテニスはできない。つまりぼくは、（考えてみればこのところずっとついていなくて）十年ぶりにちょっと風邪はひく

し（例のホンコン風邪だ）、使いこんだ万年筆は落すし、東大入試は流れるしといった災難のあげく、昨日になって十二年も飼ってきた犬に死なれて、そのうえ左足親指の生爪まではがしてしまったのだ。話はまたずれるけれど、この足の親指の爪がないということの不幸には、それこそ経験者でなければ絶対に分らないほどの、ある決定的なところがある。つまり極端に馬鹿ばかしいような話になるが、まずともに歩くことができない。人類の誕生を決定する要件は、要するに二本足で直立歩行できたかどうかにあるそうだけれど、これに従えばいまのぼくは相当に「人類らしさ」を欠いているらしいのだ。それから、どこかへぶつけやしないかという絶えざる不安もちょっとしたものだと思う。去年の暮、真白なスエードでジャンパーを作った友達が、一日で真黒になった肩や袖口を眺めてつくづく言っていた。「おい、人間てのは、実によくあちこちぶつかりながら生きてるもんだなあ。」足の親指となるとこれはもう感心しているひまもない。とにかく何をやっても、どういうかっこうをしても、かならずどこかへぶつかるべく紙一重のところに運命的に位置しているのが足の親指というやつなのだから。ぼくはこのところ確かについていなくて、これまでにも相当に「ふんだりけったり」という感じだったけれど、きょうぐらいはお手柔らかに願いたいというのが、朝目を覚まして、ヨットの帆

のように真白い包帯を巻かれている左足を見ながらの正直な感想だったのだ、全くのところ。

ところで電話だけれど、やっぱり「ママ」が出てきて、やっぱり例の調子になった。由美のママはかなりデリカシーのあるひとなのだが、いまのぼくが相手である限り、どうしたって話のコースはきまってしまうらしいのだ。

「あら薰さん、元氣？」と、彼女はやや感動的な柔らかい声で言い、ぼくは人類以前の爪なしの身でありながら、ややあきらめきって「はい。」と答えた（ぼくはどうもすぐこういう「いいお返事」をする癖があつて、この調子では瀕死の床にいても、お元氣？　ときかれたら、はい、なんていうのじゃないかと思う）。

「どうしてらした？　大変だったわね。」

「はい、まあ……。」

「残念ね。それでどうしたの？　京都へ行くの？」

「いいえ。」

「そう……。遠いでもものね。」

「ええ。」

「それに京都もいま大変なんでしょう？　ゲバルトで。」

「はい。」

「いっそのこと、京都もどこもみんな壊しちゃえば公平なのにな。」

「ハハハハ」（これはぼくの、いかにも爽やかで屈託のない笑い声のつもりなんだ……）。

「でも薫さん、よかったわ。とても元気で。」

「そうでもありません。」

「そお？　でも、落着いてるわ。」

「そうですか。そう見えるところがぼくの悩みのたねなんだと思います。きっと。」

「おやおや。あなた、おもしろいわね。でもほんとにそうね。あなたは太いに憤慨してもいいはずよね。おかしい言い方だけど。」

「孫悟空みたいに、ゲバ棒ふりまわして暴れましょうか。」

「あら、薫さんも、あの棒をふりまわすほうなの？」

「え？　いいえ、いまのところはちがいます。」

「そうでしょう？　おどかさないで。でもほんとうに残念ね。東大だけが大学じゃないんだか

らなんて言う人もいるけれど、そういうのと話がちょっと別みたいところあるでしょう？」

「はい、まあ……。」

「ほんとに、どういうんでしょね。とにかく薫さん、元気だして、そのうちまたなにか愉快にやりましょうよ、みんなで。」

「はい。」

「あら、ごめんなさいね。由美でしょう？　いますぐよびますからね。」

「はい。」

これは、はっきり言えることだが、これまでぼくに大学の話をした「ママ」との会話では、最高にものの分った程度のいいものなのだ。しつこくないし、ちょっとセンスもあって。ぼくはだから、これまでも由美とはしょつ中会いながら、なんとなく母親の彼女を避けてきたのだが、ちょっと悪かったような気がした。というのも、いまの会話でももう、少しはお分りかと思うけれど、ぼくは、時々自分でも呆れるほど礼儀正しいというか、忍耐強いというか、つまりそんなところがあるんだ。友達のなかの芸術派や革命派に言わせると、こういうぼくのつきあいのよさみたいなのは、「鼻持ちならぬ偽善」であり「許し難い俗物根性」であるとかなん

とかいうことになるわけで、そしてぼくもその点ほぼ全く同感なのだが、といってこれはややどうしようもないようなところがあるのだ。つまり実際問題として、たとえばこういった年上の気のいいPTA（？）みたいな人たちを傲然と馬鹿にして、その鼻面をビシヤリとやるような快挙にできることが、どうもぼくには先天的みたいに苦手なところがある。ほんとうにぼくは、お行儀がいいだけがとりえの全くのつまらない若者なのかも知れない。

この自分が全くのつまらない若者なのじゃないかという疑いは、実は相当に昔からひそかに抱いてきたといってもいいのだけれど、決定的になってきたのはやはり日比谷に入ってからと思われる。だいたいぼくの学校には、ふつうの「よくできる」秀才も多いけれど、それ以上に、猛烈個性的でいわば天才肌の変り者がいっぱいいるのだ。この連中をぼくは芸術派と名づけてひそかに恐れているのだが、実際彼らに比べると、ぼくはこの十八年間いったい何してきたのだろうと思うほどのありさまだ。たとえば入学早々、ぼくは芸術派の一人と文学の話をして、シェイクスピアとゲーテが好きだなんて言っちゃったのだが、もうこれでアウトだったらしい。これはあとで知ったことだが、ぼくはその瞬間に「古典派」とレッテルを貼られてポイと土俵の外へ投げ出された。しかも悪いことには、そんなこととは知らないぼくは、そのすぐあとで

『椿姫』にすごく感激した話なんかをしてしまったのだからさあもういけない。ぼくはつまり古典派どころか「論外なやつ」になってしまったわけだ。そして一番ぼくが困ることは、（これは内緒の話だけれど）ぼくはいまだにシェイクスピアとゲーテが好きだし、（もちろんぼくだって少しは進歩するから、いまはドストエフスキーとカフカがとても気になっているけれど）『椿姫』を読めばきつとまた不覚の涙をこぼすにちがいないと思われる点にある。まあいまのところ彼ら芸術派は、赤坂見附の駅やゴーゴー喫茶で知り合った美少女や年上の女性との話なんかを「アンチロマン」風なんかで書いているけれど、きつとそのうち大作家になった暁には、品行方正でよく「お勉強」して悩みの影なんか全然なく、いつも雄鶏みたいにきちんと七時に起きて学校へ来る『椿姫』の好きなぼく（これは困るけれどみんなほんとのことなんだ）なんてのは、始末におえない俗物の典型としててんばんにやつつけられるんじゃないか、ああ。

ところで電話だけれど、由美は（言い忘れたけれど、これがぼくの電話した女友達の名前なんだ）やけにやさしい声で「おはよう」なんて出てきて、ぼくはなんとなくほっとしたものだ。というのは彼女は、幼稚園と一緒に通っていた（いやそのずっと前のヨチヨチ歩きの）チビの

時からいまに至るまで、首尾一貫して気難しくてお天気屋で、うつかりするとすぐ舌かんで死んじやいたい気持になるような極端にデリケートなタイプなのだ。こんな女の子に、テニスの約束という一種のデートの取消しを申し出て、しかも特にその理由である生爪をはがしたことをごくあっさりと楽しそうに、いわば非印象的に陳述するのは、相当に気骨のおれる事業ではあるまいか。つまり彼女に、かくかくしかじかの状況下で、廊下にどさっとおいてあったスキーのそのストックのきつさを、見事左足の親指の爪と肉の間で猛然とけつとばして、なんて話をしたらもう最後なのだ。彼女はきつと胸を悪くしてキャッとかなんとか叫んで（あるいは黙ったまま蒼くなつて）以後十年はぼくと会ひ気にならないだろう。ぼくだって思い出すと実はゾッとするのだから。

ところが彼女は、そんなことおかまいなしに（まあ知らないのだから当り前だ）、ねえ、ねえ、なんてまためったやたらと嬉しそうにしゃべり始めたものだ。

「ねえ、エンペドクレスのサンダルの話知ってる？」

「え？　なんだって。」

「エンペドクレスって、世界で一番最初に、純粹に形而上的な悩みから自殺したんですって。」

「へえ。」

「それでヴェスヴィオスの火口に身を投げたんだけど、あとにサンダルが残っていて、きちんとそろえてあったんですって。」

「へえ。」

「素敵ね、エンベドクレスって。」

「うん(?)」

「サンダルがきちんとそろえて脱いであったんですって。いいわあ。」

「ふーん。」

「ねえ、とってもすごい話じゃない?」

「うん。」

あとになって思えば、ぼくはその時、それほんとうかい、すごいなあ、といったことをなんとか表現するか、または感に堪えたまま黙っていればよかったのだ。でも、なにしろ不意打ちだったし、そのきちんとしてそろえたサンダルというのが相当にこたえたものだから、言うなればイメージをまとめるというか時間をかせぐというか、つまりはそんな曖昧なつもりでなんとな

くボンボン言ったのがまずかった。

「その、なんだな、エンベドクレスってのは、例のイオニア派のあれだな。」

「イオニア派？」と、とたんに彼女の声が陰しくなった。無理もないけれど。

「うん、ほら、万物は火と風と水と土からできていて、愛と憎しみの力でくっついたり離れたりするって言ったやつだ。火と風と水と土がだよ。」

ぼくはできるだけ陽気に言ったのだが、彼女はもう氷のように冷たくなってしまった。もういけない。

「へえ、あなたよく知ってるわね。」

「だって受験生だからね。まあ、八百屋がキャベツ売るようなものだ。」

「ほんとによく知ってるわ。」

「つまらないことをいっぱい、ね。」

「あたしをからかってんの？」

「ちがうよ。しまった、と思ってんだ。分るだろ？」

「そう。」と彼女は素っ気なく言って、それから改めてきめつけるような調子で「じゃ、分っ

たのね。」とゆっくりと言ってきた。

これじゃ、ぼくだってちょっと頭にきてしまう。

「なにが？　つまり、サンダルがきちんとそろえて脱いであったんだろう？」

「そうよ、ヴェスヴィオスの火口にね。」

「世界最初の、純粹に形而上的悩みで自殺したんだな。」

ぼくには、彼女が電話の向うで、スーッと息を呑みこむのが分ったように思えた。やがて彼女は極端に起伏のない声で言った。

「あのね。あたし、こんなこと言いたくないけど、この話ゆうべきいて、それからずっと、きょうあなたに会ったら話してあげようと思ってたんだわ。」

「……………」

「でも、いまの氣持をお伝えすれば、舌かんで死んじやいたいわ。」

ぼくは黙ってじっとしていた。ぼくはこれまで彼女と、それこそ数えきれないほどけんかをしてきたが、「舌かんで死んじやいたい」が出た時は、もう何をやってもことを悪化させるだけなのだ。もちろん考えてみれば、確かにぼくにも悪いところはあったけれど、でも、もとは